

全久院報

松本市深志3-7-50 電話 0263-36-3211

大屋根の瓦吹き替え工事

檀信徒の皆さまには日頃全久院護持のためにご尽力いただき、心から感謝申し上げます。

さて皆さまに寄付をいただき進んでおります本堂の瓦吹き替え等工事の進捗状況をご報告いたします。右の写真は本堂の裏側（東側）のもので、瓦工事を担当していただいている宮澤瓦店棟梁によりますと、瓦を置く面積が広いこと、特別注文の瓦一枚の面が通常の瓦より広いことなどから、瓦を葺くのに、何列、何行で葺くのか

を計算し、等間隔で隅から隅まで敷き詰める段取りをするのが大変難しい。また受ける屋根板の歪が大きいので、瓦を載せる面を均等に平らにするのに大変な技術がいる、ことなどご苦労を話していただきました。



この写真を撮るのに私も足場によじ登りましたが、あまりの急勾配に足が震えました。こういう場での作業になれている棟梁も、常に足と、指先で踏ん張っているようで、腰を痛めているとのことでした。6月に入り裏側の作業は細部を残して80パーセントがすみましたが、これからは隅のところの仕上げと、雨に対する処理など一番技術が伴う作業が残っています。いよいよ棟梁の技の見せ所です。表側では古い瓦をはぐ作業が始まりました。背景の町並みより、どれだけの勾配の中で作業をしているかごらんいただけたと思います。

お盆までには工事を完成する予定ですが、それまで檀信徒の皆さまにはご迷惑をおかけします。なにとぞご容赦のほどお願いいたします。また、寄付は5月末現在530軒、3900万円のお申し出をいただき、3500万円受領いたしました。工事の手付けに1000万円、中間払いに2000万円支払いましたが、まだ1500万円足りません。世界経済が低迷し、家計のやりくりも大変な中、皆さまのご苦勞は計り知れませんが、まだご寄付いただいております皆様には、引き続きご協力いただきますようお願いいたします。

1、工事費の見積もりは

本堂大屋根瓦葺き替え37,800,000円、本堂トイレ6,300,000円、庫裡台所5,400,000円、合計49,500,000円です。

2、工事期間

- ・本堂大屋根瓦葺き替え工事は8月のお盆には間に合うように工事終了の予定です。
- ・本堂トイレは6月より工事が始まり、8月のお盆



には間に合うように完成予定です。

・庫裡台所はトイレが完成次第工事を始め、今年中に完成の予定です。

工事期間中は足場や工事車両などで皆様にはご迷惑をおかけするかとと思いますが、ご寛容の程よろしく願いいたします。

3、寄付金について

5月末日までに、約530軒、3500万円の寄付をいただきました。目標額は5000万円ですので、いっそうのご協力をお願いします。

一口 25,000円 (皆様に平均三口をお願いいたしたいと存じます)

4、これからの寄付の申込み方法

申込みは 先にお配りした申込み用紙を郵送かファックスで全久院へお送りください。
送り先住所 〒390-0815 松本市深志3-7-50
ファックス 0263-34-4300
寄付締切り 平成22年12月末日

5、寄付の払込みについて

払込み期間 自 平成21年9月1日
至 平成22年12月31日 (檀家様のご希望、ご相談ください)
払込み方法 1、全額 一括払い
2、分割 複数の払込み回数可能 (檀家様のご希望、ご相談ください)
3、払込み 現金 寺院へ持参か、現金書留にて
ゆうちょ銀行 払込み口座 払込み用紙にて
(なるべく払込みにてお願いいたします)

以上ご理解のほどよろしく願いいたします。寄付に関しましては別紙「本堂大屋根瓦葺き替え、檀信徒用台所・トイレ修理に関する寄付のお願い」をお配りしました。お手元がない方はご連絡ください。お送りしますので、その様式にてお申込みください。よろしく願いいたします。

お盆参りのお知らせ

お盆のお参りの予定を次の表にしましたのでご覧ください。本山修行中の長男、俊浩も棚経に回ります。昨年お参りから帰るのが遅いので聞いてみると、本山ではお参りに行った家でお茶や食事を出されたら、必ず全部いただいて帰ることになっているから、出されたのをいただいている、とのことでした。私がそんなことしたら、太ってしまうし、時間が遅くなって疲れてしまうし、そこまでの気力はありません。さすが修行中の若者だ、と改めて見直しています。また、お参りに上がった皆さんから、「すっかり落ち着かれて、堂々とおまいりしていただきました。声も益々磨きがかかりましたね。全く去年とは別人のようです」と励ましていただきました。本年は住職と回る軒数が同数になります。このコースを覚えてもらい、2~3年したら回るコースを変え、住職と俊浩が全部の檀家様のお参りをします。今年の予定は下記の表のとおりです。従来の周り順と変更があります。よろしく願いいたします。

8月	住職の回る範囲	俊浩
9日	新盆のお宅	
10日	安曇、明科、麻績など超遠方	

11日	並柳、寿、塩尻、村井、平田、など市外南部	笹部、征矢野、南原、石芝、二子、神林、笹賀
12日	筑摩、惣社、横田、岡田、沢村など市外北部	笹賀、石芝、南松本、荒井、新村、波田、沢村、蟻ヶ崎、城山
13日	源地、梶、清水、女鳥羽、など市内北東部	宮村、埋橋、庄内、東中条、豊田町、など市内南部
14日	横田、旭町、浅間、北深志、沢村、蟻ヶ崎、大手、丸の内、など市内北西部	南新町、井川城、鎌田、本庄、博労町、天神、宮村、中町、小池町、飯田町、本町
15日	城西、城山、新橋、島内、蛇原、白板、留守だったお宅、	渚、巾上、伊勢町、国分町、留守だったお宅
16日	留守だったお宅	

お盆前の作業と懇親会にどうぞ

を催したいと思います。昨年も15人の方に参加していただくことができました。写真は、山門の中の掃除の様です。住職も堅苦しい着物を作業着に替え、一緒に作業をし、一緒に汗をかき、一緒に美味しい一杯を頂きたいと思います。

7月24日(土) 15時より掃除(お墓・窓拭き・山門など) 17時より夕食を兼ねた懇親会 全久院の庭に集合 作業のできる服装でお越しください。厳粛な中でのふれあいでなく、汗をかきながらの作業や懇親ですので、堅苦しくないお寺の様子もわかっていただけるかと思えます。参加希望の方は食事の都合がありますので、電話にてお申し込みください。

本年も、お盆が始まるにあたり、山門の掃除、お墓の掃除や、窓拭きをしていただき、その後懇親会



境内散歩 - 達磨さま -

本堂中央に釈迦三尊像が奉ってありますが、その向って左側に達磨様が奉ってあります。ダルマさんというと、にらめっこや、七転び八起き、張子のダルマを思い浮かべるほど、日本の生活に密着した存在ですが、実は達磨様は中国に禅を伝え、中国禅宗の初祖といわれてた実在の人です。僧名は菩提達磨、菩提は「悟り」達磨は「教え」を意味する古代インド語です。禅宗の教えを中国にもたらしたのですが、中国にはまだ受け入れるだけの下地がなく、少林寺で9年間壁に向って座禅をし続けたのです。この座禅の姿が手足のないダルマ人形になったのです。が、確かな記述が少なく、その一生は謎に包まれています。

言い伝えをまとめてみますと、本名は達摩といい、西域の国、香至公国王の三男として生まれました。お釈迦様から27代の般若多羅尊者の名声を聞き、国王は宮殿に招き宝珠を贈りました。お礼に「この宝珠に勝る宝物はありますか」と3人の王子に聞くと、「これは無上の宝で、これを受けるにふさわしい方は尊者のみです」と二人の兄は答えました。が、「この珠は宝物に違いはありませんが、法珠に勝るものはありません。正しい教えがこの世の至高の宝です。尊者様が教え

る道こそこの世を照らす光明であり、一切衆生の心を明るくし、正しい生活の根本となる尊い宝です」と答えました。尊者は感心し、出家求道を進め、国王も承諾しました。国王が急逝すると出家し、尊者の弟子になり菩提達磨の名を授かりました。

師匠に従い40数年厳しい修行と教理の研究に没頭しました。一人前と認められたのですが尊者は「許しを受けたからといって教えを説こうと思っただけではならぬ。私の元で悟り後の修行に励みなさい。私の死後インドをくまなく歩き、正法の布教をなさい。私の没後67年後には中国に渡り、正法を伝えなさい」と言い渡しました。

尊者の死後インドでは仏教が6宗に別れ、互いに反目するようになりました。達磨は各宗を訪れ正しい教えに導きました。自国では父と長男が逝去し、次男が国王となっていました。邪教に心酔し、仏教排斥を始めました。弟子に正法を説かせ、王を起伏させると共に、国王も達磨の存命を喜び、仏法の護持を近い、達磨を城に招きました。伝道生活67年、いよいよ中国への旅立ちです。

達磨は単身商船に乗り、タイ、ベトナムと航海を続けましたが、ある時はスマトラへ、あるときはボルネオへと流され、3年後にようやく広州湾に達しました。この時すでに100才を越える高齢となっていました。当時の中国は梁(りょう)の時代で武帝の統治下でした。到着は520年9月21日といわれています。高名な達磨の到着を聞き、武帝は金陵の都に招きました。11月1日都に到着した達磨さまと武帝の有名な問答が始まります。「無功德」「廓然無聖」「芦葉の達磨」「面壁九年」「慧可断臂」と続きますが、次号に連載します。



花祭り - 松本仏教和合会

お花祭りは松本仏教和合会主催で毎年5月第三日曜日に開催されます。今、私は和合会の総務部長を務めています。当日のお祭りを迎えるにあたり、4月1日から1月間、約1000軒の托鉢をします。色々な宗派の寺院の檀家さんの仏壇の前でお参りをします。お茶をいただいたり、昼食をいただいたりします。お祭りの準備や、托鉢の段取りをするのが総務の仕事です。



和合会には私たちの宗派曹洞宗や、臨済宗、真言宗、天台宗、浄土宗、日蓮宗、浄土真宗の41ヶ寺から構成されています。様々な宗派が托鉢に参加し、花祭りを行うのは日本中探しても他に類を見ません。宗派の違いを乗り越えて一つの催しに協力するという事は、他の地域では考えられないこと、とのこと。実際、托鉢をしない宗派、仏壇の前で家門繁栄・身体健

全などを祈願する教えがない宗派などがあり、全部の宗派が統一した行動をとることはできません。しかし松本は廃仏毀釈を乗り越えてきた歴史があり、その宗派の壁を乗り越えてきたのです。

今年も4月1日から5月10日まで、土日を除く平日の午前中托鉢をしました。他地域のお寺様は「松本の寺でなくて良かった」と言うほど、時間を割いて托鉢することは厳しい修行です。その修行で頂戴した浄財で花祭りを開催します。今年の花祭りは雨が降り、稚児行列は中止となりましたが、ボーイスカウト・ガールスカウト・各種ボランティア団体・石匠組合・松本シティーマーチングバンドなど、多くの皆さまの協力をいただきこの祭りが行われました。110年ほどの歴史を持つこの祭りは松本の歴史、檀信徒の皆さまの支えがあってこそです。地域が育んできた歴史や文化や祭りを大切に、次の世代に伝えてゆくのが私たちの務めと考えています。現代は歴史や文化や祭りを無視して、自分勝手を通してしまう風潮がはびこっています。それこそ現代抱える様々な問題の元凶ではないでしょうか。私たちが子供や孫に伝えなければならないことがたくさんあります。

全久院の催しもの

新年会を今年も1月23日に開催しました。総

代さま、檀信徒の皆さま、観音講、ご詠歌、座禅会、茶道部の皆様、りらの会、総勢60人の参加をいただきました。「全久院には茶道部があるのに茶を味わったことがないよ」と法事のとき言われ、確かに稽古としての茶道とばかり考え、皆さまと楽しむ茶道になっていなかった、との思いで皆さまへの呈茶を始めました。



また、イス座禅、ご詠歌、観音講の皆さんの唱歌の合唱など各部が日ごろ楽しんできたことを、

新年会に参加いただいた皆さんと一緒にすることができました。お寺は住職のものではなく、檀信徒の皆さままで建てていただいた建物です。特に松本は、全久院は廃仏毀釈の過酷な歴史を皆さまの力で復興に結び付けていただきました。檀信徒の皆さまが心静かに安らげる場となれるような新年会を目指してまいりますので、皆さまのご参加よろしくお願いたします。



仏教ミニ知識

盆棚の飾り方

1、棚を作る場合

上の段に本尊様、(本尊様は仏壇に入れてお盆中は閉じておくというお宅もあります。その家のやり方を尊重してください)お位牌、塔婆をまつる。

2段目に供物やお膳、水やお茶。3段目に過去帳、花、燭台、線香立て、鐘、マッチや火消しや線香入れなどの道具をおきます。棚の数が多いお宅は



上の写真のように各棚に分けてお供えください。

2、仏壇を使う場合

仏壇は常のとおりまつる。手前に経机を出すお宅は机の上に、経机を出さず引き棚を使うお宅はその上に棚の3段目に飾る過去帳や花や鐘などを飾る。その他灯笼や飾り花、いただいた供物などは写真のとおり適所に飾る。またお寺が配る五色の盆旗は、写真のように広げて糸などを通して吊るか、棚に広げて置いてください。



初めにも書きましたが、こうでなくてはいけない、ということはありません。先祖様をお迎えするという気持ちをこめて、その家に伝わった仕方で飾っていただくのが大切なことと思います。

スメーダ青年 ― お釈迦さまの過去世の前身

お釈迦様にまつわる様々な物語があります。その物語は2種類に分けられ、釈迦として生まれる前の物語を「前生物語」と言い、お釈迦様が生まれ、育ち、どのように修行し、悟り開かれたかを物語りにしたものが「仏伝」といいます。難しい教えをわかりやすい物語にして庶民に語りかけたのです。前生物語はまた次の機会に紹介しますが、今回は釈迦が悟りを開かれる契機をスメーダ青年に託して説明した物語を紹介します。

昔、インドのある都にスメーダという僧侶階級の青年がいました。彼は若くして両親を亡くし、多くの財産を相続しました。両親は多くの財産があっても死ぬ時に持つてはいけません。人間の究極の価値は何なのかを求め、ヒマラヤの山中にこもって瞑想を続けました。

その頃、弟子を従え諸国を歴訪していたある仏が山のふもとの町にやって来ることになりました。町の人々は町を美しく飾り迎えることにしました。スメーダ青年は道がぬかるんで汚くなっているところを担当し、一心不乱に補修をしましたが、補修が終わらないうちに仏が町にやってきてしまいました。スメーダは仏が泥の道にはまらないように、自分の背中の上を歩いていただこうと思い、泥の道にうつ伏せになりました。仏が自分の背中を渡っていかれる姿に触れて、スメーダははっと気付きました。

「私一人が力を得ても、私一人が迷いを渡ったとしても、それに何の意味があろう。むしろ一切の人々を迷いから渡す人に、自分もなろう」と覚悟を定めたのです。

一般に釈迦の悟りの物語は「四門出遊」です。王子であった釈迦が城の東西南北の門から、庶民の生活をのぞくと、ある門からは毎日の生活に追われる人、老いた人、病の人、今にも死にそうな人を見て、生老病死の四苦を知り、人間にとっての苦しみの根元の四苦を解決しようと出家した、という物語が有名です。しかし、スメーダは他者の苦からの解放が、人間にとって第一の願いであり、他者を第一とすることが悟りそのものであることを物語っています。自分の悟りを追及しようとする悟りと、他者の悟りを第一義とする悟りが描かれています。これらのお経が書かれた紀元前2世紀ころには釈迦の教えが様々な解釈され始めたことを物語っています。

この仏はスメーダの心に菩提心を灯した仏として、燃灯仏といわれ、「かれは遠い世に、きっとゴータマという覚者になるであろう」と予言しました。この燃灯仏の話しを記述したのが「燃灯仏授記」というお経になっています。お経は難しいと思われがちですが、このようにやさしく説かれたお経がたくさんあります。これからももっと紹介してゆきます。

茶道コーナー

初釜 今年は1月10日に行いました。初釜は今年最初の茶をお弟子さんに振る舞い、一年間の稽古を充実したものにとの気持ちを整える大切な行事です。本山から特別許可をもらい、俊浩に休みを取らせ、私の代わりに濃茶を点ててもらいましたが、濃茶の作法は教えてありませんでした。初釜の点前は、



炉で台子で皆具という一番難しい点前です。本番まで3日しか稽古の時間が取れません。一日目は本人も何を教えられているかもわからない状態で、袱紗や濃茶入れの扱い、濃茶の煉り方など丸暗記させて、2日目からは10回ずつ点前をさせました。赤ん坊の頃から茶室で遊んでいて、お茶が大好きで、今でもケーキより和菓子のほうが好きだというだけあって、3日目にはすらすら茶を点てることができました。何とか茶道も後を継いでもらえるかも知れません。

私も父の代から、茶道では必ず礼儀として使われる扇を初釜で配っていましたので、今年の扇を書きました。禅語に「柳は緑、花は紅」とあり、柳緑花を字で書き、梅の絵を描いて紅を表し



ました。この扇を一年の思いをこめて、皆さんに差し上げました。柳は緑、花は紅のように、それぞれの力や個性を精一杯磨いて、自分らしさに気付き、磨き、精一杯生きる、そんな一年であって欲しい、そんな稽古をつんで欲しい、という意を込めました。今年一年茶に望む私の気持ちを表したのですが、そんな張り詰めた稽古ができる一年にしたいと思っています。

三千家 茶席や法事の席で「表千家と裏千家と何が、どう違う？」とよく聞かれます。詳しいことまで知りませんでしたので調べてみました。元々は「千利休」が始めた千家流の茶道が元で、表、裏と別れていたわけではありません。その茶を継いだのが子供の「少庵」で2代目。3代目を継いだのがその子供の「宗旦」でした。千家の中心になる茶室は「不審庵」と名付けられていたので、「不審庵を継いだ」とされました。宗旦が60才の頃、不審庵を3男の宗左に継がせ、自らは不審庵の裏に「今日庵」を建て隠居しました。以後4男の宗室と共に、茶をたしなみしました。なお、2男の宗守は宗旦の父、少庵の隠居所「官休庵」を継ぎ、武者小路千家としました。官休庵は石川丈山が広島浅野家を辞退、宮使いをしないという意味で名付けた茶室で宗旦に贈ったものです。石川丈山は愛知県生まれで、祖父以来徳川の武士でした。32才の時大阪夏の陣では腸チフスにかかり高熱を発しながらも豊臣陣営に切り込み、敵将3人を切ったほどの武士でしたが、漢学を学び、「日本の李杜（李白・杜甫）」と言われました。浅野家を退職後、京都一乗寺に詩仙堂を建て、自然を友に隠居生活し、煎茶をたしなみ、煎茶道の祖といわれた方です。

なお宗旦は公家や大名に近づかず、華美な茶に反抗し、利休のわび茶に終始し「こじき宗旦」と呼ばれるほどの生き方をした茶匠でした。81才でなくなり「虚空めが 虚空に空と 生まれ来て また空くうと なる鐘の音」という自分の生き方に厳しい辞世を残しています。

このように、3男・4男・2男に継がせた家が、表千家・裏千家・武者小路千家の三千家となり今日に至っています。不審庵と今日庵の名前の由来ですが、大徳寺古溪和尚が利休に贈った偈「不審花開今日春（不審 花開く 今日の春）」より付けられました。

今日庵の由来には興味深いエピソードが残っています。大徳寺清巖和尚は宗旦と親交が篤く、ある日宗旦は清巖和尚を今日庵に招きました。なかなか来ない和尚を待ちかねて外出すると、すれ違いに和尚が到着。宗旦の妻は障子を貼っているところで、和尚はその障子紙に「懈怠（けたい）の比丘、明日を期せず」（怠け者の私は明日が約束できないから今日やって来たのに）と書き残しました。帰宅した宗旦はその障子紙の余白に、

「懈怠の比丘明日を期せず」（偶然出くわす僧では当てにならない、今日会いたかった）と書き和尚に送りました。この今日会いたいが今日庵の由来となり、この障子紙は今日も今日庵に残っているそうです。茶を通して人格が火花を散らす親交から、私たちは学ぶことが多いと思います。この写真は表千家の門です。利休居士という字が見えると思います。この門から北に30メートルのところに裏千家の門が棟を並べて建っています。



葬儀は全久院で！ご検討ください

ここ数年リラの会の立ち上げから始まり、法要でもっとお寺を使ってもらえるように皆さまに勧めて来ましたが、おかげさまで、今年に入って葬儀は全体の3分の1はお寺を式場にしてもらえるようになりました。8年前はお寺での葬儀はゼロだったところからのスタートでした。確かに最新の設備を備えた業者の式場は設備も整い、便利ですが、その分費用はビックリするものです。

比較してみますと100人のお参りの人と仮定すると、ご遺体の自宅への搬送から始まる全ての費用は、業者では、100人×25000円＝250万円。寺を使えば100人×10000円＝100万円。差し引き150万円の差が出ます。寺で行う業者がいますので、手間は全くかかりません。同じことをするのに150万円の違いです。よく積立金があります、といいますが、30万円としてもそれを捨ててしまってもまだ、120万円浮いてきます。

法事や葬儀はぜひ全久院で！

金銭的なことばかりでなく、葬儀や法事は宗教的名儀式ですから、寺という場所でなければ、その儀式を行う意味が消えてしまいます。戒律を授かり、菩提寺の住職に戒名を付けていただき、一つになったみなさんの心に送られて仏様になる、という葬儀の意味はやはり自宅や寺という場所でなければなりません。様々な事情で仕方がない場合もありますが、是非経済的にもお寺を使っていたいだきたいと思えます。イスに坐っていただけるよう、駐車場の確保、など以前よりは便利になってきていますし、もっと皆さんが使いやすいように改善してゆきますので、是非一考ください。いざという時では業者の言うなりになってしまいます。自分の葬儀の仕方を住職と相談しておくことをお勧めします。葬儀の後請求書を見て子孫をビックリさせるようなことだけはしないでいただきたいと思えます。

俊浩 修行奮闘記

俊浩の修行も4年目に入りました。現在、代侍者寮に配属され、本堂での法要で導師の香合を持ち、導師と一緒に参りする役を勤めています。全ての儀式の動きを覚えないとこの役は務まりませんので、彼にとっては毎日が勉強ということになります。右の写真は1月本山の直末会新年会のお参りに行った時に撮ったものです。本山では1月には寒行をします。鶴見の町に托鉢に出ます。その日は東京でも珍しくみぞ

れの降る寒い日でした。修行僧の衣を繕ったり、様々な手助けをしてくださる白慈会の婦人部の皆さんが、托鉢に出かける修行僧を送ってくださる場面に、偶然出くわしました。薄い雨合羽と、雨でも擦り切れないように特別に作られたビニールのわらじで、役目上先頭きって飛び出して行きました。厳しい修行の中でも、周りから暖かく見守ってもらえる豊かさを感じて修行に励んでいると感じました。

また、修行僧からなる組織「三松会」の会長を仰せ付かっており、一番の仕事は7月の盆踊りの執行です。鶴見ではこの盆踊りは有名で、お盆の期間中、毎日数千人の踊りの輪ができます。夜店も出るので香具師の親分への挨拶も欠かせないとのこと。様々な経験をさせてもらえるチャンスを、最大限活用してもらいたいものです。因みに7月からは本堂で儀式の際、お経を読み始める堂行（どうあん）という役に付く予定です。その準備にお経の唱え方などの訓練を受けているそうです。本堂にてどんな経験させてもらえるか、次の報告にご期待ください。



大黒コーナー … オペラ 蝶々夫人公演 練習開始 …

プッチーニのあの有名なオペラ公演を企画しました。来年5月8日（日）午後2時より、松本市市民芸術館大ホールにて上演するため、準備・練習を始めました。蝶々夫人というとどなたでも名前をご存知だと思います。長崎を舞台にアメリカ海軍士官ピンカートンとのせつなく、どうにも救いようのない悲恋を描いたオペラの傑作です。

没落氏族出身で15才で芸者になった蝶々夫人はピンカートンに巡り合い、結婚。一子をもうけるが、ピンカートンは帰国。軽薄な男の裏切りを知らず、愛を信じ続ける蝶々夫人。アメリカ夫と結婚したピンカートンは長崎に立ち寄るが、愛を信じる夫人の純真さと真心を知り、いたたまれず、会わずに去る。そして悲劇の結末。というストーリーの中に様々な人間模様が展開します。

また作曲当時ヨーロッパではパリ万博を通して紹介された日本の芸者や浮世絵、陶磁器などの日本文化にあこがれる、一大日本ブーム（ジャポニズム）が風靡した時期でした。そこで随所に「越後獅子」「君が代」「お江戸日本橋」「宮さん宮さん」などの日本の歌が組み込まれています。1800年代の後半に日本の文化や生活習慣や宗教を取り込んだオペラが作られ、1904年にスカラ座で初演を迎えたのですから、今の私たちにとっても大変な驚きです。

音楽的にも、ピンカートンの「世界のどこに行こうとも」、ピンカートンと蝶々夫人の二重唱「魅惑に満ちた瞳の愛らしい子よ」、蝶々夫人の最大の聴きどころ「いつか私達は見るでしょう（ある晴れた日に）」、アメリカ領事シャープレスの「手紙の場」、夫人の女中スズキと蝶々の二重唱「桜の枝を揺すぶって」、スズキとシャープレスの二重唱「私にはわかっている 彼女の苦しみには」、そして蝶々の最後のアリア「可愛い坊や」、など聴きどころが満載です。

最高のメロディーが用意されている分、歌手に要求される歌唱力、表現力、声量、音域、正確な音程などの技術は、最高度なものを要求されます。後一年大道具や演出なども練りながら準備してまいりますので、是非ご期待ください。因みに入場料は3000円です。是非聴きに來てください。

掲示板

(皆様のご参加お待ちしております)

～施食会～

8月5日(木) 12時より自家製によるお弁当、12時半より観音講の皆さんと一緒に懐かしい唱歌の合唱、13時よりお話、14時より法要(ご詠歌の会の皆様による奉詠)、15時よりお塔婆を配ります。今年も皆さんにお参りいただけるような内容をと考えています。ぜひご参加ください。



・・・ 檀信徒作業と懇親会 ・・・

例年通り 7月24日(土) 3時より全久院 で開催します。3時よりお墓の清掃、窓拭き、山門の掃除をしていただきます。5時より懇親会となります。屋外でのバーベキューと冷たい生ビールという趣向です。皆様の参加お待ちしております。参加希望の方は電話でご連絡ください。

・・・ 座禅会 ・・・

9月11日(土)・9月25日(土)・10月23日(土)・11月20日(土)・12月18日(土)
お粥と精進料理。以上が下半期の日程です。毎回夕方4時集合4時40分まで青山俊董師の市民タイムスのコラム「従容録」を住職が解説し、5時45分頃まで座禅、6時まで茶話会という予定で行います。12月18日はお粥と精進料理を経験していただきます。座禅を経験していただくだけでなく、ものの見方や生き方を豊かにすることができますと思います。ぜひご参加ください。

・・・ ご詠歌会 ・・・

9月9日(木)・10月14日(木)・11月11日(木)・12月9日(木)

午前10時より11時半まで、白板 東昌寺副住職 飯島恵道師にご指導いただきます。一緒にいかがですか。

・・・ 観音講 ・・・

毎月17日10時から12時半まで行います。10時から観音様にお勤め、10時20分からご詠歌、10時50分から大黒の指導で唱歌の合唱11時20分より食事という日程です。現在15人ほどの参加者があります。気よりが良く60代から90代の方が元気に集まってきます。気楽な会ですのでぜひご参加ください。

お知らせ

・・・ ホームページを開設しました ・・・

<http://zenkyuin.or.jp/>

全久院の催しに参加する若い方から、「全久院報を配っているようだけど、すぐ仏壇に上げられてしまうようで見たことがない。若い人にはコンピュータのほうが身近だからホームページにしてくれないか」との要望がありました。全久院報も全久院を知っていただけるようさまざまなコーナーを作ったので、それをそのままホームページようにすることが出来るとのことで、コンピュータ管理をしてくれている檀家の丸山耕一さんに依頼して解説していただきました。将来は皆様と意見や情報を交換できる場に育てて生きたいと思います。ぜひ一度開いて見てください。